

フライブルクやマールブルクでハイデガーから指導を受けた世代のなかで、ハンス・ヨナスは生命倫理学や環境倫理学に最も（というより、おそらく唯一）正面切って関わった哲学者である。一九七九年、彼は『責任という原理』を著した。個々の行為ひとつだけなら重大な結果を招かない行為が集団的に行なわれることで、その影響は地球規模に広がり、不可逆な生態系破壊を惹き起こしうる。しかも、未来世代は現在世代の行為の一方的な被害者になりかねない。ここにヨナスは、不均衡な力関係に対応する倫理規範である責任を基礎におく「科学技術文明のための倫理学」（それは同書の副題であった）を構想する。すなわち、（問われているのが集合的行為であるゆえにその行為主体としての）人類は、人類以外の生物種を含むすべての生命を存立可能にしてきたこの地球の生態系を危機にさらさないようにする責任を、なканずく、責任を認識できる唯一の存在者である人類の未来への存続にたいする責任を担わなくてはならない。彼はまた、生命倫理学の分野では、人体実験に警告を發し、移植のために脳死を死とする動きに反対した。ヨナスは現代技術についてまさに彼の脳死論文の表題どおりに「流れに抗して」思索しつづけたのである。

他方ハイデガーは、すべてを利用すべき用象として捉えるように挑発する現代技術のありようを集・立（Ge-stell）と呼んだ。そのなかで人間もまたたんなる用象とみなされうる。それゆえ、集・立はたんに人間が独力で生起しえたり応接できたりするものではない歴運である。しかし、極度の危険である集・立という開けのなかに、救う者の到来する可能性もある。人間は技術の本質を省察するなかで、その真理を見守り、救う者の到来を待ちうける。

ハイデガーの技術論と対比したとき、人間の責任に訴えるヨナスの議論は、ひょっとすると、なお人間に過剰な期待を託すものにみえるだろうか。だが、ヨナスもまた、脳死論や人体実験論が端的にそうであるように、なしうることをただちになすべきことに転化する現代技術が人間をもその対象とする危険に目を向けていた。逆に、ヨナスの技術論からハイデガーの議論をみると、そこに徹底的に欠落しているのは責任——とくに行為主体の側の人間がその技術による操作対象とした人間にたいする責任の観念、ないしは問題の把握である。かわりにそこでは、あらゆる本質の不伏蔵性とそれに先立つ伏蔵性とを大地の上で見守る人間の本質の尊厳が語られている。こうした思索にたいして、ヨナスは「人間が彼の兄弟の守り手であることができなかつたときに、人間が存在の牧人として讃えら

れるのは聞き入れがたい」と批判した。人間がその同胞を守れなかった事態として、彼が思いを馳せているのは（明言されていなくとも明らかに）ホロコーストである。ハイデガーのナチズムへの協力が彼をその旧師から永久に離反させたのだった。

ヨナスの技術論の意図を理解するには、彼の哲学的閱歴の把握が必要である。私見によれば、それをごく単純化して素描するならこうである。彼はまず、ハイデガーの実存分析をグノーシス思想の解釈に適用し、その有効性を証明した。だが、ハイデガーへの評価が一変した後、近代の実存思想とグノーシス思想との親縁性は、自然からの人間の疎外、疎外ゆえに自然本性をもたない者の規範の欠如として特徴づけられた。これにたいして、ヨナスは戦後に展開した生命の哲学を通じて、人間をふたたび自然のなかに位置づけるように試みた。人間は進化の過程から生まれながら、しかし、技術的操作によって自他のあらゆる生命を含む自然を支配する力を獲得した。自然のなかに人間を位置づけることで、ヨナスにとって、技術の問題は「人間は存在すべきか、なぜ存在すべきか」という形而上学的な問題となるとともに、『責任という原理』では価値多元社会の倫理理論を目指すゆえに抑制して語られなかった神学的思索へと通じている。

ヨナスの議論を考えあわせるとき、実存思想は思いのほか近代の機械論的自然観と親和的にみえる。さらに、カントと考えあわせるとき、個的な実存に拠って立つゆえに、カントの人間の尊厳の概念にはありえた類的なものとの関連を欠く。他方、人間を自然のなかに位置づけるヨナスでは、人間はカント風な英知的存在者の地位に達しない。その自然哲学は進化を内包するゆえに、古代・中世の自然法が規定する人間の本質を復活するわけではない。

人間が余すところなく技術的操作の対象とされてはならないとすれば、現代の技術の支配にたいする批判的な視点は、人間をどのようなものとして描き出すか、しかも人間がそれとの何らかの関わりにおいて初めて人間たりうるような、個々の人間を超越するものをどのように描き出すのかという問いに行き着く。時間の制約でどれほどできるかはわからないが、当日はこの点を意識した論点の提起を行いたい。